今の国道の札幌側から番号をつけ、一番は旧千歳線陸橋付近だった

昭和 15 年頃の国道 12 号。道幅は現在の半分以下で、人通りもない。場所は不明

入植地を決める

旧仙台藩白石の人々が最初に入植を指定された土地は山鼻だった。しかしカシワの多いところは地味が悪いと判断してここを断り、月寒の北外れ、後に白石村役場（今の白石会館）ができる丘から見た望月寒（もちきさっぷ）（今の白石中央）を入植地と決めた。

開拓使が先に幅 10 間（18 メートル）、延長 2,000間（3,600メートル）の道路を切り開いており、この両側に1戸あたり間口40間（72メートル）、奥行 300 間（540 メートル）の土地を100戸分割り当てた。道路といっても、切り株が残り、湿地もありで、現代の感覚では道路とは言えないものだったろう。

道路をはさんで番号をふる

土地の位置はくじ引きで決められたが、誰もが札幌に近い方を望んだ。身分の高さも配慮されたので身分が高い人は札幌側に多かった。貫属取締の佐藤孝郷は右28番で、ほぼ中間の位置にあるが、全体を管理しやすい位置ということで決められたのかもしれない。後に善俗堂が隣に建てられ、村の会議はここで行われたが、村の中間なので都合がよかったのだろう。

このときの１番の正確な位置ははっきりしていない。当時は正確な地図がないため、現地を見ながらおおまかに決めたと思われる。

確認の唯一の方法は現在の所有者からさかのぼって調べることだが、開拓の当初からめまぐるしく所有者が変わり、小さく分筆されているので、調べるのは極めて難しい。

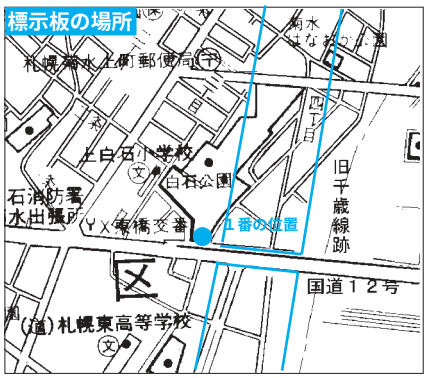
ひとつの手がかりとして、奥羽盛衰見聞誌（明治初期）と現在の地図を重ねてみた。この古地図と現在の地図を国道12号を軸にコンピュータ処理で重ね合わせてみると、意外に正確であることが分かる。周辺部はかなりデフォルメされているが、幹線道路はほとんど正確である。

１番の位置は菊水地区と白石中央地区の境界線で、旧千歳線と国道12号の交わる地点、陸橋の下である。道路の両側それぞれに右、左をつけて1番から50 番まで番号を割り当てた。

この古地図は1番から7番までが横丁に移った後なので１番の位置が記載されていないが、区画と思われる短線の区切りで判断すると、現在の白石公園付近が１番と推定できる。

１番から７番までは春に水に浸かる

入植した翌年、雪解けとともに左右1番から7番までの14戸が水浸しになり、住めなくなった。低湿地だったために



起きたことで、この人たちは南側に土地割をしてもらい横丁地区に移住した。

当初は道路を挟んで左右に１番から50番までの番号が割り振られたが、翌5年には1番から100番までの連番に変更されている。

本府へはぬかるむ細道

札幌本府を往復する道路は最も重要だったが、豊平川を渡るには唯一の橋である豊平橋を渡るしかなかった。

豊平橋付近に開拓使の製材所があり、ここから白石に向かう斜めの踏み跡程度の道があった。この道は巻末の大正5年の地図に「山道（やまみち）」と記されているが、この道が本府への唯一の道だった。小屋掛けなどの資材はこの道から運ばれた。

白石村民はこの道を馬車も通れる道にするよう願い出たが、開拓使は明治5年から1年間をかけて幅5間(約9㍍)、延長2,588間(約4,700㍍)の、現国道36号に抜ける札幌本府通を造った。しかし冬は交通が途絶え、夏は深くぬかるんで、馬車が通るのが困難という道で、快適な道路になるまでには長い年月が必要だった。

山道と呼ばれた白石最古の道路は道道東札幌停車場線として現在も健在である。

（塩見一釜）

※望月寒は古い時代から「もちきさっぷ」、「もつきさっぷ」、「もつきさむ」と呼び方が変わっている。

奥羽盛衰見聞誌の図と現在の地図を重ねたもの。これによると１番の位置は白石公園の付近であることが分かる。